HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヨシヤの改革 ：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	髙橋, 優子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13833号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78685
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yuko_Takahashi_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　髙　橋　優　子

学位論文題名
ヨシヤの改革：「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」

・本論文の観点と方法

旧約聖書に記述されている「ヨシヤの改革」あるいは「申命記改革」と呼ばれる出来事（紀元前7世紀後半のユダ王国でヨシヤ王が行なったとされている改革）が，「エサルハドン王位継承誓約文書」（Esarhaddon's Succession Oath Documents; ESOD と略記される）の直接的影響下に起草された「申命記」に基づいて遂行され，それが現在まで続く宗教史上あるいは思想史上の発展の起点となったという観点から本論文は作成されている。本論文の方法は，学問系統からいえば文献学および考古学であるが，文献学としての聖書学において歴史的・批判的方法と呼ばれる手法と，思想史研究の手法が用いられている。考古学に関しては，「ヨシヤの改革」に関連するとされる考古学的発見とその研究史を批判的に論じている。本論文においては，研究史の整理（第1章），「エサルハドン王位継承誓約文書」と「申命記」（およびレビ記）の比較検討（第3章），「申命記」6章4−5節の解釈（第4章），古代イスラエルにおける王権観の変遷の記述（第5章）が行なわれている。さらに，学問的手続き上扱う必要のある考古資料についての検討（第2章），同じく王権観の変遷に関連する詩篇72・80篇の分析（第6章）がそれぞれ組み込まれている。

・本論文の内容

まず「序論」において，「ヨシヤの改革」という出来事を理解するためには，エサルハドン王位継承誓約文書（ESOD）が「申命記」に与えた直接的な文学的影響の検討が重要であることが提案されている。

第1章では，「ヨシヤの改革」についての多岐にわたる膨大な研究史が整理されている。その結果，とくに旧約聖書学において方法論が拡散傾向にあり，ヴェルハウゼン以来の四資料仮説がほとんど意味をなさなくなっている現状においては，楔形文字文書と聖書資料の比較が有効であるとされる。本論文の場合，それは ESOD と「申命記」の原典比較という形で行なわれている。

第2章においては，研究史の一部としての考古学的知見が聖書文献学的研究とは別立てで整理されている。メツァド・ハシャブヤフ，アラド，ラキシュといった，「ヨシヤの改革」研究で必ず言及される遺跡にかかわる物質文化と碑文の検討が行なわれ，ラキシュからの情報には多少の意義が見られるものの，メツァド・ハシャブヤフやアラドから得られる情報については，近年の研究により従来の解釈が大きく修正されようとしているため，特段の意義が認められないことが確認されている。そのことは，考古学的知見の意義を否定しているのではなく，現在までの聖書考古学が「ヨシヤの改革」に関する重要な情報を与えるほど進んではいない，ということを意味しているとされる。

第3章は，本論文の中核部分であり，ESOD と「申命記」が原典言語（前者のアッカド語は渡辺和子による日本語訳，後者は執筆者によるヘブライ語からの試訳）に基づいて比較されている。ESOD と「申命記」（とくに28章）の間によく似た箇所が存在することは，ESOD の大体のテクストが判明した段階（ニムルド版の解読）で既に知られていた。しかし研究者の間では，それが西アジアに一般的な慣習の反映なのか，ESOD から「申命記」への直接的かつ特異的影響なのかをめぐって現在も激しい論争が続いている。したがって，当該問題におけるさまざまな議論を評価するためには，ESOD と「申命記」の間で類似が観察される箇所を詳細に比較検討する必要がある。本章では，それに当てはまる箇所の網羅的な比較検討が行なわれている。その結果として，従来は見落とされてきた（指摘は存在したが概ね無視されてきた）両者を結びつけるレトリックに注目するこ

とによって, ESOD から「申命記」への特異的かつ直接的な影響の蓋然性の高さが提案されている。「交差的引用 “Inverted quotation” (Beentjes, 1982) 」というレトリックは，聖書文書間の引用の際にしばしば観察される。たとえば，A と B という（単語，文，観念などの）要素が文章にある場合，引用元が AB の順であれば，引用先では BA とするような文彩である。これは文章の意味をほとんど変えないため，あまり注目を集めなかった不思議な「伝統」なのである。聖書文書間のみならず, 聖書文書とそれ以外の文書間にもこの現象が存在すること, すなわち ESOD § 4c と「申命記」13 章 1 節に, 引用関係とこのレトリックが観察されることをはじめて指摘したのは B. M. Levinson, 2010 である。この先行研究を念頭において両テクストを比較したところ，上記の指摘以外にも，ESOD § § 63-64 と「申命記」28 章 23－24 節，ESOD § § 38A-40 と「申命記」28 章 27－29 節，ESOD § 47 と「申命記」28 章 53－57 節，ESOD § § 10-18 と「申命記」13 章 2－11 節にも同様の現象がみられる，ということが指摘されている。ESOD § § 63-64 と「申命記」28 章 23－24 節については，レビ記 26 章 19 節 b にも並行する箇所が存在するため，ESOD § 63-64 と「申命記」28 章 23 節，レビ記 26 章 19 節 b は「同旨」のテクストとして研究者の間で知られてはいた。しかし，この「交差的引用」というレトリックの詳細な論及は見られない。さらにこれらの「交差的引用」が認められる箇所は, ただ似ているというだけにとどまらず, (単語や文, 文章などの内容ではなく) テクストの直接的な引用関係を示唆していることに意義が認められるとされる。つまり,「申命記」の中には西アジアに共通の内容が観察されるにとどまらず，ESOD から直接に引用したと看做してもいいような箇所が複数存在する，という指摘がなされている。

第 4 章では,「申命記」6 章 4－5 節の分析を行なうことによって,「申命記」の編集段階といわゆる一神教の発展段階との対応関係が示されている。この対応関係は，ヨシヤの改革前後の時系列と整合的に把握することができるとされる。すなわち，ヨシヤ即位後改革前：宗教的には一時的拝一神教の段階で,「申命記」記者による「原申命記」起草の時代，次に，ヨシヤ改革期：宗教的には恒常的一神教の段階で,「第一の申命記史家」による「申命記」の編集の時代，ヨシヤ死後（捕囚期）：宗教的には唯一神教の段階で,「第二の申命記史家」による「申命記」の編集が行なわれた時代，という流れである。

第 5 章では，第 4 章で示された対応関係が，旧約聖書における王権観の変遷とも整合的に把握できることが明らかにされている。すなわち，古代イスラエルにおける王権観は，ヨシヤ時代前期（改革前）には非常に制限されたものであったが，ヨシヤ時代後期（改革期）には逆に強化され，捕囚期から捕囚後にかけては，人間の王の代わりにヤハウェが王とみなされたうえ，その王権は宇宙論的次元にまで強められているということである。こういった王権観の変遷が, 第 4 章で示された「申命記」の編集段階と一神教の発展段階をめぐる流れと合わせて捉えることができるとされる。

第 6 章では，詩篇研究においてしばしばヨシヤ時代との関連が議論される詩篇 72 篇と 80 篇が分析されている。最大の論点であるアッシュルバニパルの即位式の讃美と詩篇 72 篇との関係は，二次的なものであることが明らかだとされる。

結論として述べられているのは，まず，ESOD の「申命記」への直接的・文学的影響は,「交差的引用」という指標によって裏づけられるということ，そしてそれにより，ESOD における「永遠の誓約」という観念が旧約聖書にもたらされ，さらに，それが今日まで続くヤハウェの誓約宗教の起点であると考えられる，ということである。